

2013年度 (平成25年度) 卒業論文

メディアと言語

-3. 11報道をめぐる日独英新聞メディアの比較分析-

Media and Language - A Comparative Study of
Newspaper Articles about the 2011 Earthquake, Tsunami
and the Nuclear Disaster in Japan
in Japanese, German and English -

Medien und Sprache - Analyse und Vergleich von Nachrichten über die
Katastrophe vom 11. März auf Deutsch, Englisch und Japanisch -

慶應義塾大学
総合政策学部 4年
佐藤友紀子
藁谷郁美研究会

<目次>

第一章	はじめに.....	3
1.1	研究背景及び問題の所在	
1.2	先行研究における位置づけ	
1.3	仮説	
第二章	文献調査及びテキスト分析.....	6
2.1	調査概要	
2.2	対象データ	
2.3	手法	
2.4	結果	
2.4.1	-ドイツ語で発信された新聞-	
2.4.2	-英語（アメリカ）で発信された新聞-	
2.4.3	-日本語で発信された新聞-	
2.5	まとめ	
第三章	インタビュー調査.....	29
3.1	調査概要	
3.2	対象データ	
3.3	手法	
3.4	結果	
3.5	まとめ	
第四章	総括・展望.....	40
4.1	文献調査とインタビュー調査を通じた考察	
4.2	本調査の限界・反省	
4.3	今後の展望	
	謝辞.....	43
	引用文献・参考文献.....	44
	【付属資料① 研究対象記事】	46

〈図表目次〉

〈図1 2012年3月9日 Frankfurter Allgemeine Zeitung 1面〉.....	10
〈図2 2012年3月7日 neues deutschland 10面〉.....	20
〈表1 研究対象メディア媒体〉.....	6
〈表2 分析対象記事〉.....	7
〈表3 記事A〉.....	9
〈表4 記事B〉.....	12
〈表5 記事C〉.....	13
〈表6 記事D〉.....	14
〈表7 記事E〉.....	15
〈表8 記事F〉.....	16
〈表9 記事G〉.....	17
〈表10 記事H〉.....	18
〈表11 記事I〉.....	19
〈表12 記事J〉.....	20
〈表13 記事K〉.....	22
〈表14 記事L〉.....	23
〈表15 記事M〉.....	24
〈表16 記事N-記事S〉.....	25
〈表17 主な質問項目〉.....	29
〈表18 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) でドイツ語を履修する学部・大学院生6名 (女子学生3名、男子学生3名)〉.....	30
〈表19 ハレ大学 (Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg) で日本学を専攻するド イツ語母語話者の学部・大学院生6名 (女子学生3名、男子学生3名) 〉.....	30
〈表20 三重大学に所属する学部・大学院生5名 (女子学生3名、男子学生2名) 〉.....	30
〈表21 第1回目と第2回目インタビュー調査におけるポジティブな意見〉.....	31
〈表22 第1回目インタビュー調査におけるネガティブな意見〉.....	32
〈表23 第2回目インタビュー調査におけるネガティブな意見〉.....	34
〈表24 第1回目インタビュー調査における曖昧な意見〉.....	35
〈表25 第2回目インタビュー調査における曖昧な意識〉.....	37
〈表26 三重大学の学部・大学院生調査結果〉.....	38

第一章 はじめに

1.1 研究背景及び問題の所在

インターネットの普及・拡大により、我々は従来のメディア媒体である新聞・雑誌、テレビやラジオ等をはるかに超越した情報量を手にする事ができる。端末の検索ボタンをクリックするだけで、世界中の情報を収集できる状況がある。一方で情報内容の精査はきわめて難しい。日本人にとって、母語である日本語あるいは、多くの日本人にとって既習言語である英語で発信された情報コンテンツだけで、あらゆる分野について情報を収集することは不可能である。例えば地域研究を行う上で、その地域の言語で発信された内容を資料として収集できなければ、実態を正確に把握することはできない。英語で書かれた二次資料だけで本質を知ることはできない。

我々が日々接するニュース情報はこの点でどのように評価するべきなのだろうか。ドイツ語圏で発信された情報を我々は原文で収集しているわけではない。デンマーク語圏で発信された情報、フィンランド語圏で発信された情報、あるいはフランス語圏で発信された情報も、我々は原文で読んでいないわけではない。しかしながら、欧州で発生した事件・事故の報道はニュース情報として伝達される。そこで提供されるニュースのほとんどが通信社からの情報である。日本のメディア媒体が提供する国際ニュースの大半はロイター等に例を見るように大半が国際通信社からのものである¹。つまり、我々は日々膨大な情報の中に身を置く状況にあるにも関わらず、発信された言語で提供される一次資料に触れる機会は非常に限られている可能性が高い。研究対象を日本語で発信されたニュース情報に向けた場合、この現象はどのように捉え得るのであろうか。日本語で発信されたニュース情報は他言語圏でどのように受容され、またそれが発信される際には、元の情報との間にどのような差異が生じるのだろうか。

この点を明らかにすることで、世界の情報メディア上における日本社会像の相対化を試みることが、本研究の目的である。そのための調査対象として、2011年3月11日に起こった東日本大震災の関連記事にフォーカスをあて、日本で報道された記事の内容とドイツ語圏および英語圏（アメリカ合衆国）で報道されたニュース記事を比較分析する。また、メディアの内容と人々の意識との間に存在するであろう乖離をインタビュー調査を通して明らかにする。

¹ 柳澤伸司「ジャーナリズムの歴史と課題」、浪田陽子・福間良明（編集）「はじめてのメディア研究」世界思想社 2012, pp.71-95 参照

1.2 先行研究における位置づけ

本研究を進めるにあたり、報道比較の点においては震災後の2011年度中盤以降、夥しい数の書籍や雑誌が出版されている。その多くは『東日本大震災：特別報道集写真集：2011.3.11:1ヵ月の全記録:M9.0日本は決して屈しない:地震・津波・放射能汚染』(2011)、『TSUNAMI3・11:東日本大震災後記録写真集』(2011)や『東日本大震災—地震・津波・原発被災の記録—特別報道写真集』(2011)に見られるように災害地の状況やその時の人々の様子を報道の形で提示したものが多く見られた。この分野では特に『報道写真全 2011.3.11-4.11 東日本大震災』(2011)、『東日本大震災1ヵ月の全記録—闘う日本』(2011)、『東日本大震災読売新聞報道写真集』(2011)、『東日本大震災1年の全記録—日本人の底力—』(2012)等に見られるような全国紙レベルの新聞社による報道記録と並んで、『東日本大震災全記録被災地からの報告』(2011)、『平成の三陸大津波：特別報道写真集』(2011)、『再び、立ち上がる！—河北新報社、東日本大震災の記録』(2012)、といった被災地に拠点を置く地方紙からの報道記録も衆目に値する。2011年以降出版されたメディア媒体の中心は、地震災害や原発事故をめぐる内容についての実態を伝えようとする「報道」であったと言えるであろう。この流れの中で『原発報道とメディア』(2011)『原発とメディア 新聞とジャーナリズム二度目の敗北』(2012)『メディアと原発の不都合な真実』(2012)に代表される、当時の報道のあり方に批判的に提示した著書が出版されている。

また、海外のメディア報道に目を向けた上で日本国内の報道を相対化しようとする試みは、著書『The Japan Times NEWS DIGEST 臨時増刊号 3.11大震災・福島原発を海外メディアはどう報じたか』(2011)や『世界が見た福島原発災害—海外メディアが報じる真実』(2011)、月刊誌『COURRIER Japon』などが見られる。とくに『COURRIER Japon』では2011年5月から7月まで連続したテーマ：“がんばれ！日本は必ず復活する” (2011年5月号)、“本当の「原子力」の話” (2011年6月号)、“危機の時代の「エネルギー」新常識” (2011年7月号) に見られるように、各号において共通テーマのもと、世界各地で発信されたニュース記事を翻訳の形で掲載・提示しており、取り分け3.11関連の記事では、日本国内の報道記事と相対化させた、という意味で、重要な問題提起を行ったと言える。

本テーマに関連したシンポジウム等に関してはnippon.comが主催した『3.11後の報道や危機管理のあり方を探る』²や、2012年3月3日には東京大学福武ホールにて、日本マス・コミュニケーション学会60周年記念シンポジウム『震災・原発報道検証—「3.11」と戦後日本社会』が挙げられる。その際、日本以外の地域で3.11がどのように報道されたのかについて議論されている。

本研究課題は一時的なメディア報道研究としてではなく、報道内容がその後どのように変容するのか継続して追跡すべき分野である。その中で、多様なメディア報道内容を比較・分析していくことは重要かつ必要性の高い研究分野であろう。本研究は、まさにこの視点を

² 情報(2011年10月22日、JA 共済ビル カンファレンスホール、nippon.com)

重要視するものである。特に発信言語が日本語・ドイツ語・英語と多様なメディア報道データの比較・分析・考察をして行く事に意義がある。そのことによって、本事例研究が東日本大震災報道における日本・ドイツ・アメリカ3者のメディア比較研究の分野のみならず、日本における報道実態の相対化に新たな視点を提示できると考える。

1.3 仮説

東日本大震災の報道においてドイツ語と英語ではどのようなことが重要であると意識されているか、また実際の人々と意識の乖離があるのではないかという点から仮説を二つ設定し、本研究を進めていく。ノーマン・チョムスキーは『メディア・コントロール —正義なき民主主義と国際社会』の中で私たちが受け取る情報は政治によって操作されていると述べている。また、メディアは真実を報道しないとも述べていることから、仮説1として東日本大震災の報道は自国の問題(国策)を意識した報道に利用されているということと、仮説2として報道内容と人々の意識には乖離があるという仮説を設定し、研究を進めていく。

第二章 文献調査及びテキスト分析

2.1 調査概要

本研究では2011年に起こった東日本大震災をドイツ語と英語と日本語のニュース記事でどのように振り返っているか、2012年3月11日前後と2013年3月11日前後で比較する。

2.2 対象データ

資料データとして収集・分析する対象を新聞記事に絞り、日本語、ドイツ語、英語の3言語を表現手段とした媒体に設定した。具体的には日本国内において日本語で発信された新聞記事(プリントメディア)、2) ドイツ語圏においてドイツ語で発信された新聞記事(プリントメディア)、3) アメリカ国内において英語で発信された新聞記事(プリントメディア)を対象とした。いずれも調査対象期間を震災後1年が経過した2012年3月11日以降に設定する。各新聞事故内容の伝達よりも、むしろ過去への「振り返り」をテーマとする記事を調査対象とすることで、各新聞社の視点の相違を明確にする。

調査対象としては全国紙および地方紙における東日本大震災の新聞記事を扱う。東日本大震災に関する報道内容を、文字データ(タイトル、サブタイトル、本文)・写真(写真、写真キャプチャ)・画像・メディア媒体名、発行年月日、紙面、レイアウト、文字数等を含めて一つのデータベースとして構築する。なお対象とする新聞媒体は以下のものである(表1)。

<表1 研究対象メディア媒体>

発信言語	媒体名	種類	調査対象期間
日本語圏	朝日新聞	日刊全国紙	2012年3月11日～
	朝日新聞(三重県版)	日刊地方紙	2012年3月11日～
	読売新聞	日刊全国紙	2012年3月11日～
	読売新聞(三重県版)	日刊地方紙	2012年3月11日～
	毎日新聞	日刊全国紙	2012年3月11日～
	毎日新聞(三重県版)	日刊地方紙	2012年3月11日～
ドイツ語圏	Frankfurter Allgemeine Zeitung (フランクフルター・アルゲマイネ 新聞)	日刊全国紙	2012年3月11日～
	neues deutschland (ノイエス・ドイチュラント)	日刊地方紙	2012年3月11日～

	Mitteldeutsche Zeitung (ミッテル・ドイチェ新聞)	日刊地方紙	2012年3月11日～
英語圏 (アメリカ)	The New York Times (ザ・ニューヨークタイムズ)	日刊全国紙	2012年3月11日～

なお、本調査の分析対象とした記事は〈表 2〉の通りであり、その他参照した記事は巻末に載せる（付属資料①）。なお、日本語訳は全て筆者本人が行った。

〈表 2 分析対象記事〉

記事	新聞社	発行日	掲載面	文字数	タイトル
A	Frankfurter Allgemeine Zeitung (フランクフルター・アルゲマイネ新聞)	2012年3月9日	1面	82字	Gebeten für die Opfer (犠牲者のための祈り)
B	Frankfurter Allgemeine Zeitung (フランクフルター・アルゲマイネ新聞)	2012年3月9日	1面	486字	Arbeiten am Energieplan (エネルギー政策に勤めよ)
C	Frankfurter Allgemeine Zeitung (フランクフルター・アルゲマイネ新聞)	2012年3月9日	3面	1046字	Nicht zu lange draußen spielen (あまり外で長く遊んではいけない)
D	Frankfurter Allgemeine Zeitung (フランクフルター・アルゲマイネ新聞)	2012年3月10日	13面 Die Lounge(談話)	1075字	Ein Jahr nach dem Tsunami Umstrittene Reaktoren (津波から一年後、議論の余地ある発電所)
E	Frankfurter Allgemeine Zeitung (フランクフルター・アルゲマイネ新聞)	2012年3月12日	2面 Politik(政治)	378字	Japan gedenkt der Opfer (日本の犠牲者を思い出す)
F	Mitteldeutsche Zeitung (ミッテル・ドイチェ新聞)	2012年3月12日	6面 Politik(政治)	259字	Gedenken an die Opfer der Katastrophe (災害の犠牲者を思い出す)
G	Mitteldeutsche Zeitung (ミッテル・ドイチェ新聞)	2013年3月12日	4面 Meinung und Hintergrund (意見と背景)	258字	Auf dem Absteigenden Ast (だんだんと悪くなる)
H	Frankfurter Allgemeine Zeitung (フランクフルター・アルゲマイネ新聞)	2013年3月12日	13面 Die Lounge(談話)	1602字	Neuanfang mit Hindernissen (困難と共に新しい始まり)
I	neues deutschland (ノイエス・ドイチュラント)	2012年3月8日	6面 Wirtschaft - Soziales - Umwelt (経済・社会・環境)	584字	Zweifel am endgültigen Ausstieg (最終的な脱原発への疑い)
J	neues deutschland (ノイエス・ドイチュラント)	2012年3月12日	1面 Wirtschaft - Soziales - Umwelt	345字	Fukushima ist überall (福島はどこにでも)

			(経済-社会-環境)		
K	The New York Times (ザ・ニューヨークタイムズ)	2012年3月10日	1面	47字	A Year Later, Japan Remembers Loss and Heroism (一年後日本は死者と英雄を思い出す)
L	The New York Times (ザ・ニューヨークタイムズ)	2012年3月10日	6面 International (国際)	1818字	Japan Finds Story of Hope in Undertaker Who Offered Calm Amid Disaster (日本は災害中に平穏を提供した葬儀人に希望の物語を見つける)
M	The New York Times (ザ・ニューヨークタイムズ)	2012年3月12日	7面 International (国際)	1165字	Uprooted by Tsunami, Church's Flock Regroups (津波から追い立てられて、教会信者たちは再び1つになる)
N	朝日新聞	2012年3月10日	10面 社説	1885字	被災地の住まい再建 ここにこそ、人と資源を
O	読売新聞	2012年3月11日	3面 社説	1776字	鎮魂の日 重い教訓を明日への備えに
P	読売新聞	2012年3月12日	3面 社説	933字	3・11の誓い 日本人の国民性が試される
Q	毎日新聞	2012年3月11日	3面 社説	2036字	震災1/7 未来のために「NPO革命」 はじめよう
R	朝日新聞	2013年3月10日	12面 社説	1833字	大震災から1年 津波からの復興 もっと「なりわいの再建」を
S	読売新聞	2013年3月12日	3面 社説	945字	3・11追悼式 被災の教訓を次世代につなげ

2.3 手法

テキスト分析は『メッセージ分析の技法 -内容分析への招待-』(K. クリップENDORF, 1989)を参考にテキスト内で使用された言語をカテゴリーに分けて分類する。その後、記事内で使用されている用語はどのような意味を持つのか、表現方法の特徴に考察を加えながら検討する。

宮田光雄『ナチ・ドイツと言語-ヒトラー演説から民衆の悪夢まで-』(2002)では、政治の世界では言葉という武器が大きな働きをし、とりわけ圧倒的な力で民衆を動因したナチ・ドイツの《政治宗教》³においては宗教用語が多様されたことが述べられており、そのことから対象記事内で使用されている「宗教用語」に注目し、カテゴリー①とした。

次に東日本大震災に関連する自然現象と原発事故に関する用語に注目し、自然現象用語をカテゴリー②、原発事故関連用語をカテゴリー③とした。

また、ドイツ語圏において 2011 年の東日本大震災における福島原発事故によってエネルギー政策が大きく変動したことからエネルギー政策関連用語に注目しカテゴリー④として分類した。

また、調査を進めていく上で軍事用語と軽蔑用語がテキスト内に浮上したことから軍事用語をカテゴリー⑤、軽蔑用語をカテゴリー⑥として分類した。

2.4 結果

2.4.1 -ドイツ語で発信された新聞-

ドイツ語で発信された新聞記事、記事 A～記事 J のテキスト分析結果を示す。なお本文で扱った新聞記事のドイツ語訳は筆者が翻訳した。聖書のドイツ語訳は Die Bibel (2010)、英語訳は King James Version of the Holy Bible (1769)、日本語訳は『新共同訳』(2008)を参照した。

記事 A で使用された用語のカテゴリーの分類を<表 3>に示す。

<表 3 記事 A>

用語 (ドイツ語)	カテゴリー	訳 <宗教用語の場合、聖書内での意味> [出典]
Gebete	①	祈り <神への祈り> [Apg 10:4]
Opfer	①	犠牲者 <生贄> [Heb 11:8]
Stilles	①	静寂な <静かに (学ぶ)> [1Ti 2:11]
Gedenken	①	思い出す <記念する> [Psa 111:4]
Gläubige	①	信者 <キリスト教徒> [Jes 47:11]
Erdbeben	①、②	地震 <同様> [Off 11:13]

³宮田光雄『ナチ・ドイツと言語-ヒトラー演説から民衆の悪夢まで-』2002, pp. 6 参照

Tsunami	②	津波
gebetet	①	祈った〈神へ祈った〉 [Jos 10:12]
Flutwelle	②	津波
vernichtet	①	破滅した〈同様〉 [Off 18:19]
zerstörten	①	破壊した〈同様〉 [2Kö 3:25]
Atomkraftwerk Daiichi	③	(福島) 第一原発

記事 A の宗教用語„Gebete “(祈り)は「神に対する祈り」を意味し、„Opfer “(犠牲者)は「生贄」を意味する。記事の„Gebete für die Opfer⁴ “(犠牲者のための祈り)の一文は、「神の生贄に対する祈り」と解釈することもできる。

記事 A のタイトルである„Gebete für die Opfer “の下には以下の〈画像 1〉が利用され、写真では卒塔婆に向かって祈る姿の僧侶たちは黒と白の衣装を着ている。僧侶が着る黒は「死・悲しみ」を象徴⁵し白は「悲しみ・生贄」を象徴⁶している。このことから„Opfer”は犠牲者よりも「生贄」というイメージを読者は連想するのではないだろうか。

一方、写真で見られる卒塔婆は「供養追善のため墓の後ろ立て」である。「供養」は「死者の霊に供物を捧げること」であり、「追善」とは「死者の冥福を祈ること」である。写真の僧侶たちは実際、神・生贄に対して祈っているのではなく「冥福を祈っている」姿であろう。また、「冥福を祈ること」とは「死後の幸福を祈ること」であり、仏事である。ただし、記事 A が発行される Frankfurter Allgemeine Zeitung (フランクフルター・アルゲマイネ新聞)はドイツ社会のエリート層が読む新聞であり、読者はキリスト教徒が多いと考えられる。記事 A を読む際に、キリスト教徒であるドイツ人読者は「生贄への祈り」と解釈しながら記事を読むと考えられる。

〈図 1 2012 年 3 月 9 日 Frankfurter Allgemeine Zeitung 1 面〉



⁴ Frankfurter Allgemeine Zeitung 2012 年 3 月 9 日

⁵ Christoph Wetzel (2008) Das Grosse Lexicon der Symbole, Prima Verlag (p. 274 l. 24-1. 26)

⁶ Christoph Wetzel (2008) Das Grosse Lexicon der Symbole, Prima Verlag (p. 296 l. 35-1. 40)

次にテキスト内で自然現象用語としてカテゴリー化した「津波」には二種類の表現がある。1つ目は„Flutwelle”、2つ目は„Tsunami”である。記事Aの発行元であるFrankfurter Allgemeine Zeitungでは外来語として日本語の„Tsunami”を使用する前までは、「津波」として„Flutwelle”を使用していた⁷。Flutwelleはドイツ語の複合語であり、「Flut」（洪水）と„Welle”（波）が合わせられた用語である。内陸に面する地域が多く、川の氾濫による洪水被害が多いドイツで„Flut”によって読者に津波被害を身近に感じやすくさせるため、Tsunamiだけでなく„Flutwelle”も使用されたのではないかと考える。

また、「Flut」（洪水）は聖書の中で„Denn ich, ich werde die Flut kommen lassen, eine Wasserflut über die Erde. Alles Lebendige soll darin umkommen, alle Menschen und Tiere.”（わたしは地上に洪水をもたらし、命の霊をもつ、すべて肉なるものを天の下から滅ぼす。地上のすべてのものは息絶える。）[1Mo 6:17]に見られ、生命が滅ぶことを意味し、読者は„Flut”から「死」を連想するのではないかと考えられる。

„Flut”と宗教用語„vernichtet”（破滅した）は記事Aで„Die Stadt in der Präfektur Miyagi wurde im März 2011 von der Flutwelle vernichtet⁸”（宮城県にある市は2011年3月に洪水から破滅された）の文に見られる。聖書では次ように使用され、„Dennoch wurde die Welt damals bei der großen Flut auf Gottes Wort hin durch Wasser überschwemmt und vernichtet.”（当時の世界は、その水によって洪水に押し流されて滅んでしまいました。）[2Pe 3:6]読者は世界が滅ぶ「恐怖」を連想するのではないかと考えられる。

記事Aのテキストに見られる„Stadt”（町）と„vernichtet”も聖書では次のように使用され、„Der Verwüster kommt in jede Stadt, keine kommt davon. Im Jordantal wird alles vernichtet und die Hochebene völlig zerstört, wie Jahwe es befohlen hat.”（略奪する者がすべての町を襲いひとつとして免れるものはない。谷は滅び、平野は荒らされる。主が言われたとおりである。）[Jer 48:8]記事Aの読者は聖書で使用されている宗教用語より恐怖を感じるのではないだろうか。

つまり、記事Aでは宗教用語によって、「神による洪水、人々の死、洪水による市や町の破滅、恐怖」を読者に連想させることを意図して„Flutwelle”、„Stadt”、„vernichtet”を使用したのではないかと考えられる。

⁷ Tsunamiという言葉は1993年7月12日に日本で起こった北海道南西沖地震を機にFrankfurter Allgemeine Zeitungで使用され始めていたことがわかった。

⁸ Frankfurter Allgemeine Zeitung 2012年3月9日

〈表 4 記事 B〉

用語（ドイツ語）	カテゴリー	訳 〈宗教用語の場合、聖書内での意味〉 [出典]
Arbeiten	①	勤める 〈再建する〉 [2Ch 5:1]
Energieplan	③	エネルギー政策
Energiewende	④	エネルギー転換
Musterknabe	⑤	模範男児
prächtigen	①	すばらしい 〈美しい、華麗な〉 [Jer 18:4]
Wirtschaftswachstums	③	経済成長
Energieverbrauch	④	エネルギー消費
Atomunfalls im japanischen Fukushima	③	日本の福島での原発事故
radikalste	⑤	過激な
energiepolitische	①	エネルギー政治
Wendemanöver	⑥	予行演習

記事 B で使用された用語のカテゴリー分類の結果を〈表 4〉に示す。記事 B では宗教用語の „Arbeiten”（勤める）とエネルギー政策関連用語の „Energieplan”（エネルギー政策）が記事 B のタイトル „Arbeiten am Energieplan”⁹（エネルギー政策に勤めよ）に見られる。宗教用語 „Arbeiten”（勤める）は聖書で「再建する」という意味を持ち、タイトルは「エネルギー政策を再建せよ」と読むことができる。

また、記事 B の本文の中で宗教用語の „prächtigen”（美しい、華麗な）は経済用語の „Wirtschaftswachstum”（経済成長）の形容詞として使用され、再統一以来最も低い水準へとドイツのエネルギー消費量 (Energieverbrauch) が下がったことを „eines prächtigen Wirtschaftswachstums”（美しい経済成長）、と表現している。 „prächtigen” は聖書で次のように使用され、 „prächtigen Zier”（美しい飾り） [Jes 28:4]、 „prächtigen Felder”（美しい畑） [Jes 32:12] 場所や衣類が「美しい、華麗」であることを表す。つまり、 „Wirtschaftswachstum”（経済成長）の形容詞として使用されることは、異なる語彙で „prächtigen” が使用されていることがわかる。

記事 B のテキスト内では軽蔑用語の „Musterknabe”（模範男児）を使用し、ドイツの „Energiewende”（エネルギー転換）は „Musterknabe”（模範男児）であると例えられている。

また、次の文では軽蔑用語、エネルギー政策関連用語、軍事用語と合わせて福島原発事故について振り返る文が見られた。 „was zum Jahrestag des Atomunfalls im japanischen Fukushima klingt wie die Erfolgsbestätigung für das radikalste energiepolitische

⁹ Frankfurter Allgemeine Zeitung 2012 年 3 月 9 日

Wendemanöver der deutschen Geschichte, ist in Wahrheit keine¹⁰⁾ (日本の福島原発事故の記念日に対してドイツの歴史上の過激なエネルギー政策予行演習は成功の様に聞こえるが、実際はそうでない。)このように軽蔑用語„Musterknabe”と„radikaliste”を使用することでエネルギー政策を批判していることがわかった。そこで、先ほど述べた„eines prächtigen Wirtschaftswachstums”は「外見だけ美しい」経済成長を意味し、経済成長をもたらせたエネルギー政策を批判しているのではないかと考える。そのように政府の政策を批判することで、タイトルより読者へ「エネルギー政策を再建せよ」と国のエネルギー政策について考え、取り組むように呼びかけているのではないかと考えられる。また、先ほども述べたように、Frankfurter Allgemeine Zeitungはドイツのエリート層が読む新聞であることから、エネルギー政策を変える力を持つ読者に向けられたメッセージなのではないかと考える。

<表 5 記事 C>

用語	カテゴリー	訳 <宗教用語の場合、聖書内での意味> [出典]
havarierten	②	事故によって破壊された
Reaktoren	③	原子炉
unterstützt	①	支える <共に組む> [2K6 15:25]
Spenden	①	救援金 <施し> [Apg 24:17]
Samaritaner	①	サマリア人 [Lu 10:33]

記事 C で使用されていた用語のカテゴリー分類を行った結果、<表 5>に示すように宗教用語の„Samaritaner” (サマリア人) が記事 C の本文で„Arbeiter-Samariter-Bundes aus Deutschland¹¹⁾ (ドイツのサマリア人のような労働者)として使用されていた。

„Samaritaner”は「迫害を受けるサマリア人」もしくは人々に救いの手を差し伸べる「善きサマリア人」を意味するが、福島原発事故の被災者の生活を報道する記事 C では次の文に見られるように、„Fernab der havarierten Reaktoren lässt sich das Leben endlich wieder entspannt genießen, dieser Wochenendfreizeiten, unterstützt durch Spenden des Arbeiter-Samariter-Bundes aus Deutschland¹²⁾ (事故によって破壊された原子炉から遠く離れることで、やっともう一度落ち着いた生活を楽しむことができる。これらの週末の自由な時間はドイツのサマリア人のような労働者の救援金を通して支えられている) 救援金を提供するドイツの労働者がサマリア人として例えられている。

善きサマリア人の話しは新約聖書ルカの福音書で見られ、以下の文に見られるように、„Am nächsten Morgen zog er zwei Denare aus seinem Geldbeutel, gab sie dem Wirt

¹⁰⁾ 同上

¹¹⁾ Frankfurter Allgemeine Zeitung 2012年3月9日

¹²⁾ 同上

und sagte: ‘Kümmere dich um ihn! Wenn du noch mehr brauchst, will ich es dir bezahlen, wenn ich zurückkomme¹³.’ (そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』) [Lu 10:35] 善きサマリア人が追いはぎに襲われた人を介抱するために宿谷の費用を支援した¹⁴。聖書で善きサマリア人が費用を支援した文は記事Bの「サマリア人」と「救援金」の言葉の意味と重なるのではないだろうか。よって記事Cの„Arbeiter-Samariter-Bundes aus Deutschland” は聖書の„Barmherzige Samariter” (善きサマリア人) [Lu 10:30-37]を意味していると考えられ、読者はドイツの政府の政策が善いものであるというイメージを連想させるのではないかと考えられる。

〈表 6 記事D〉

用語 (ドイツ語)	カテゴリー	訳 〈宗教用語の場合、聖書内での意味〉 [出典]
Ein Jahr nach dem Tsunami	②	津波から一年後
Reaktoren	③	原子炉
Die Katastrophe in Fukushima	④	福島での災害
Energiepolitik	⑤	エネルギー政策
Tsunami	②	津波
verwüsteten	①	荒廃された 〈同様〉 [Ps 17:5]
Verwüstung	①	荒廃 〈荒廃する〉 [4Mo 24:22]
zerstört	①	破壊した 〈同様〉 [2Kö 3:25]
Erboden	①	地上の国 〈同様〉 [1Mo 2:5]
Fluten	①	洪水 〈同様〉 [1Mo 7:10]
umgekommen	①	命を失う、死ぬ 〈同様〉 [4Mo 20:3]

記事Dで使用されていた用語のカテゴリー分類結果を〈表6〉に示す。自然現象の„Tsunami” (津波)と原発関連用語„Reaktoren” (原子炉)、そしてエネルギー政策関連用語の„Energiepolitik” (エネルギー政策)がタイトル„Die Katastrophe in Fukushima Ein Jahr nach dem Tsunami Umstrittene Reaktoren¹⁵” (福島での災害、津波から一年後、議論の余地ある原子炉)とサブタイトル„Die Katastrophe in Fukushima hat in Japan und Deutschland zu einem Umdenken der Energiepolitik geführt.¹⁶” (福島の災害は日本とドイツにエネルギー政策について深く考えることを導いた)の文に見られ、記事で

¹³ 同上

¹⁴ 新約聖書「ルカの福音書」10章30-37節より

¹⁵ Frankfurter Allgemeine Zeitung 2012年3月10,11日

¹⁶ 同上

では日本とドイツ、両者のエネルギー問題について書かれてある。記事Dでは始めに東日本大震災を振り返るテキストが見られ、自然現象用語の„Tsunami”（津波）と宗教用語の„verwüsteten”（荒廃された）が„vor einem Jahr vom Tsunami verwüsteten Regionen des Nordostens¹⁷”（一年前津波から荒廃された東北地域）に見られ、宗教用語の„zerstört”（破壊した）と„Tsunami”が„An der Küste hat der Tsunami rund 115 000 Häuser zerstört¹⁸”（海岸では津波が約115000棟を破壊した）に見られた。

以上より、„Tsunami”が宗教用語の„verwüsteten”と„zerstört”より神聖化され、読者は津波に対して「恐怖」を感じたのではないかと考えられる。

また、„Tsunami”は宗教用語の„Fluten”（洪水）、„umgekommen”（命を失う、死ぬ）と同じテキスト内で使用されており、以下の文で見られ„Menschen sind in den Fluten des Tsunami umgekommen”（人々は津波の洪水の中で命を落とした）から読者はTsunamiから「死」を連想したのではないかと考えられる。

〈表 7 記事 E〉

用語（ドイツ語）	カテゴリー	訳 〈宗教用語の場合、聖書内での意味〉 [出典]
Erdbeben	①、②	地震
erschüttert	①	揺れた
Tsunami	②	津波
auslösen	①	引き起こす〈贖う〉 [Jos 18:6]
schwersten Atomunfall Zeit Chernobyl	②	チェルノブイリ原発事故以来重大な事故
Atomkraft	③	原発

記事Eで使用されていた用語のカテゴリー分類結果を〈表7〉に示す。記事Eに見られる宗教用語„erschüttert”（揺れる）と自然現象の„Erdbeben”（地震）は本文のテキストで以下の文、„Japan war vor einem Jahr von einem der schwersten jemals gemessenen Erdbeben mit einer Stärke von 9,0 erschüttert worden¹⁹”（日本は一年前当時最も強いと測定された震度9の地震で揺らされた）に見られた。„Erdbeben”と„erschüttern”は地震が起こる際にドイツ語メディア上で多く使用される表現であることがわかった。また、„Erdbeben”（地震）と„erschüttern”（揺れる）は新約聖書ヨハネの黙示録で次の文に見られ、„In diesem Augenblick wird ein heftiges Erdbeben die Stadt erschüttern und ein Zehntel von ihr vernichten. “（一瞬で強い地震が町を揺らし彼らの十分の一

¹⁷ 同上

¹⁸ 同上

¹⁹ Frankfurter Allgemeine Zeitung 2012年3月12日

を滅ぼした。)[Off 11:13]地震が町が揺らし、人々を滅ぼした。よって記事Eのテキストで見られる„Erdbeben”と„erschüttern”から読者は地震の「恐ろしさ」を連想するのではないかと考える。

また宗教用語の„auslösen”（引き起こす）は聖書で「贖う」[Jos 18:6]ことを意味し、記事Eの本文で„ein Tsunami folgte, der wiederum den schwersten Atomunfall seit Tschernobyl im Atomkraftwerk Daiichi in Fukushima auslöste²⁰”（福島第一原発でチェルノブイリ以来重大な原発事故を再度引き起こした津波が続いた）と書かれている文は聖書の意味で「福島第一原発でチェルノブイリ以来の重大な原発事故を贖った津波が続いた」と読むことができ、読者は原発を「悪」津波は「善」とであると連想するのではないかと考える。

そして、記事Eの右隣にはドイツの最終貯蔵庫問題（Endlagesuche）に関する記事が掲載された。タイトルは„Endlagersuche droht zu scheitern²¹”（最終貯蔵庫探しは今にも挫折しそうである。）であり、東日本大震災を振り返る記事Eを利用し読者に対して自国の問題を関連づけようとした記事なのではないかと考えられる。

〈表8 記事F〉

用語（ドイツ語）	カテゴリー	訳 〈宗教用語の場合、聖書内での意味〉 [出典]
Schweige	①	沈黙 〈(神の)沈黙〉 [Psa 111:4]
Gedenkfeiern	①	追悼式 〈生贄を記念する〉 [2Mo 24:15]
Erdbeben	①、②	地震
Tsunamikatastrophe	①	津波災害
heftige	①	激しい 〈地震が起こる〉 [Apg 16:24]
Atomkatastrophe von Fukushima	②	福島原発事故
auslöste	③	引き起こす 〈贖う〉 [Jos 18:6]

記事Fで使用されていた用語のカテゴリー分類結果を〈表8〉に示す。記事Fの宗教用語„Schweigeminute”（黙祷）はドイツ語の複合語であり、„Schweige”（沈黙）と„Minute”（瞬間）が合わせられた用語である。聖書の中で„Schweige”とは「神の沈黙」を意味する。また、„Gedenkfeiern”（追悼式）は聖書の中で「生贄を記念する」ことを意味し、記事Fでは読者は宗教用語によって神への畏れを感じるのではないかと考えられる。また、記事Fはドイツ、ザクセンアンハルト州ハレ市で発行される地方紙、Mitteldeutsche Zeitung（ミッテルドイチェ新聞）で2012年3月12日新聞に掲載されたも

²⁰ 同上

²¹ Frankfurter Allgemeine Zeitung 2012年3月12日

のである。Mitteldeutsche Zeitungは本研究が対象としたドイツ語新聞の中で購読者数が最も多いことがわかった。

記事Fは新聞社独自の取材ではなく通信社AFP²²による情報であった。また、Frankfurter Allgemeine Zeitungの記事B、記事D、記事Eのように本研究の調査期間内で自国のエネルギー政策について述べる記事は見られなかった。以上のことから、震災から一年後である2012年の時点において、ハレ市の地方紙は自国のエネルギー政策に対する立場が決まっていなかったと考えられる。しかし、2013年3月の報道で東日本大震災と自国のエネルギー問題についてMitteldeutsche Zeitungの姿勢が変化の様子が見られた。その変化について以下記事Gに記載する。

〈表9 記事G〉

用語	カテゴリー	訳 〈宗教用語の場合、聖書内での意味〉 [出典]
Atomkraftwerke	④	原発
Super-GAU	③	想定可能な超大規模の事故
Erdbeben	②	地震
Tsunami	③	津波
gewaltige	①	強力な 〈大きな恐ろしい〉 [5Mo 6:22]
Flutwelle	①	洪水
Atomunfall von Fukushima	①	福島原発事故
radioaktiv	②	放射線
verseuchtes	①	汚染された 〈(水が) 苦くなる〉 [Off 8:11]
Wasser	①	水
Hiroshima Bombe	①	ヒロシマ原爆

ハレ市で購読されている地方紙、Mitteldeutsche Zeitungで発行された2013年3月12日の記事Gにおける用語のカテゴリー分類結果を〈表9〉に示す。〈表9〉に見られるように、記事Gでは東日本大震災で起こった津波(Tsunami)、地震(Erdbeben)と福島原発事故(Atomunfall von Fukushima, Super-GAU)について振り返る記事が掲載された。また、福島原発事故の放射能による「汚染水」は記事Gで„verseuchtes Wasser”と表現された。

宗教用語にあたる„verseuchtes” (汚染) はヨハネの黙示録„Viele Menschen starben an diesem verseuchten Wasser” (苦くなった水で多くの人々が死んだ) [Off 8:11]より聖書では水が「苦くなる」ことを意味し、現在使用されている「汚染」の意味から変化が見られた。また聖書より、苦くなった水で人々が「死んだ」ことから、読者は

²² Agency France Press (フランス通信社) のこと。

verseuchtesよふい「死」を連想するのではないかと考えられる。

記事Gの上には„Auf dem Absteigenden Ast²³”（だんだんと悪くなる）というタイトルでドイツの原発問題に関する記事が掲載され、記事中のテキストでは„Kern Energie wird zu teuer²⁴”（核エネルギーは将来とても高くなる）、„Bei den Öko-Energien sinken die Kosten, die Atomkraft wird immer teurer²⁵”（バイオエネルギーによってコストは下がり、原発は常に高くなる）という文がみられた。よって記事Gでは原子力を批判することで代替エネルギーと言われているバイオエネルギーを読者に推進し、東日本大震災を振り返る報道を通してバイオエネルギーを消費することを読者に促しているのではないかと考えられる。

〈表10 記事H〉

用語（ドイツ語）	カテゴリー	訳 〈宗教用語の場合、聖書内での意味〉 [出典]
verheerende	①	破壊的な 〈みなぎりあふれる〉 [Da 11:40]
Tsunami	②	津波
verwüstete	①	荒廃する 〈荒廃する〉 [Jes 60:18]
Verwüstung	①	荒廃 〈荒廃する〉 [4Mo 24:22]
Seebeben	②	海底地震
Flutwellen	③	津波
zerstörte	①	破壊した 〈破壊した〉 [2Kö 3:25]
risen	①	ちぎる 〈引き裂く〉 [1Mo 44:13]
Fluten	①	洪水 〈同様〉 [1Mo 6:12]
Apokalypse	①	この世の終わり ²⁶

記事Hで使用されていた用語のカテゴリー分類結果を〈表10〉に示す。記事Hは2013年に3月に発行されたFrankfurter Allgemeine Zeitungの記事である。宗教用語の„verheerende”（破壊的な）、„verwüstete”（荒廃した）は自然現象用語の„Tsunami”（津波）と同じテキストに含まれており、„vor zwei Jahren hat der verheerende Tsunami die Stadt verwüstete²⁷”（2年前破壊的な津波が市を荒廃した）から読者は津波に対して恐怖を感じるのではないかと考えられる。また、記事Hでも津波の表現として記事Aのよう

²³ Mitteldeutsch Zeitung 2013年3月12日

²⁴ 同上

²⁵ Mitteldeutsch Zeitung 2013年3月12日

²⁶ Walter Gerlach (1998) Das neue Lexikon des Aberglaubens Eichborn S.26

²⁷ Frankfurter Allgemeine Zeitung 2013年3月12日

に„Tsunami” と„Flutwelle” (津波)の両方を使用していた。

記事Hでは日本人へのインタビューが行われており、回答者の発言で宗教用語の„Apokalypse” (アポカリプセ) が使用されていた。東日本大震災当時の津波被害の様子を語る一文で、„Es waren Bilder der Apokalypse²⁸” (それはこの世の終わりのような光景だった)のように„Apokalypse” 表現されていたが、アポカリプセとは新約聖書ヨハネの黙示録を意味し、ヨハネの黙示録で„Apokalypse” とは、大きな地震による人々と町の破壊、島や山が海の中に沈み消えてしまうこと、そして恐ろしい雹が人々の上に降りかかること[Off 16:18-21]や空から火が降ってくること[Off 13:13]を意味する。このApokalypseが文中で使用されることによって、読者は聖書が表現する「この世の終わり」を連想したのではないかと考えられる。

〈表11 記事I〉

用語	カテゴリー	訳 〈宗教用語の場合、聖書内での意味〉 [出典]
Zweifel	①	疑う 〈テキスト内の意味と同様〉 [Mr 11:23]
endgültigen	①	最終的な 〈最終的な刑罰〉 [Da 9:24]
Ausstieg	②	脱原発
Reaktorkatastrophe von Fukushima	③	福島原発事故
Unglück	①	事故・不幸 〈悪を働くもの〉 [2Sa 12:11]
Anti-Atom-Initiativ	③	反原発主導者
unglaubwürdigen	①	信じることができない
Atom-und-Energepolitik	④	原子力とエネルギー政治

記事Iで使用された用語のカテゴリー分類の結果を〈表11〉に示す。記事Iはドイツの社会党新聞neues deutschland (ノイエス・ドイチュラント)の記事であり、反体制報道が特徴である。記事Iで使用された宗教用語の„Zweifel” (疑う)、„endgültigen” (最終的な)とエネルギー政策の„Ausstieg” (脱原発)は、本記事のタイトル„Zweifel am endgültigen Ausstieg” (最終的な脱原発への疑い)に見られた。この際、„endgültigen” (最終的な)は聖書で「最終的な刑罰」を意味し、読者にとって„Ausstieg” に「悪もの」というイメージが重なるのではないかと考えられる。

また„unglaubwürdigen” (信じることができない) は宗教用語で„glaubwürdig” (真実) [Joh 5:31]が含まれており、„Atom-und-Energepolitik” (原子力とエネルギー政治)の形容詞として使用されている。テキストでは„unglaubwürdigen Atom-und-

²⁸ Frankfurter Allgemeine Zeitung 2013年3月12日

Energepolitik²⁹”（信じることができない原発エネルギー政策）と書かれてあり、聖書の意味では「真実でない原子力とエネルギー政治」と読むことができる。以上より宗教用語によって、ドイツの政治体制に反対するneues deutschlandの姿勢を読者が受け取るのではないかと考えられる。

また、本調査期間中の対象記事でneues deutschlandでは2012年3月7日～12日までに共通の画像が使用された（図2）。

〈図2 2012年3月7日 neues deutschland 10面〉



図2では„Super-GAU in Fukushima”（福島での予測可能な超巨大事故）という造語が見られる。„Super-GAU”とはチェルノブイリ原発事故の際に使用され始めた造語であり、ドイツ語の報道ではFukushima-Super-GAUと表現することで、東日本大震災による福島原発事故がチェルノブイリ原発事故と同じ規模であると読者が連想すると考えられる。

また、この叫んでいる様子の人の顔は原発のハザードマークが使用され、2012年3月11日にスローガン„Fukushima mahnt!“（福島が警告する！）のもと、ドイツで行われたデモに合わせて掲載された画像なのではないかと考える。

neues deutschlandでは2012年3月9日にドイツで起こった反原発デモ、10, 11日の報道ではインドの反原発デモ、12日にはドイツとフランスで起こった反原発デモの報道とデモの様子を写真に掲載した。2013年3月12日の報道では日本で行われたデモの写真を1面に、3面にはドイツ、フランスで行われた反原発デモを報道及び写真を掲載した。以上のように世界で行われている反原発デモの報道を行うことによって読者へデモへの参加を呼びかけ、また政府に反する意識を持たせようとしているのではないかと考えられる。

〈表12 記事J〉

用語	カテゴリー	訳 〈宗教用語の場合、聖書内での意味〉 [出典]
Fukushima	②	フクシマ原発事故
überall	①	至るところに 〈四方に〉 [Jer20:10]
Entsetzen	①	恐怖 〈恐怖・恐れ〉 [Jer1:8]

²⁹ neues deutschland 2012年3月8日

Erdbeben	①、②	地震
verschwunden	①	姿を消す〈滅びうせる〉 [Jos23:16]
zerstört	①	破壊した〈同様〉 [2Kö3:25]
Tsunami	②	津波
riss	①	引きちぎる〈大地から抜き取る〉 [5Mo 29:28]
im Kernkraftwerk Fukushima	③	福島原発
GAU	③	超予測可能な巨事故

記事Jで使用されていた用語のカテゴリー分類結果を〈表12〉に示す。記事Jではまず宗教用語„überall “（至るところに）と„Fukushima “（フクシマ）が記事Jのタイトル, Fukushima ist überall³⁰ “（フクシマはどこにでも）に見られる。この文では„Fukushima “は擬人化され、地名の福島ではなく福島原発事故のことを指す。また、聖書では„Schrecken ist überall “（恐怖はどこにでも） [Jer 20:10] という文があり、„Fukushima ist überall “の文はフクシマと聖書のSchrecken(恐怖)を重ね、「福島原発事故の恐怖は至るところにある」と意味していることも考えられる。

自然現象用語の„Erdbeben “（地震）と宗教用語„verschwunden “（消える）は以下の文に見られた。„Erdbeben der Stärke9,0 das Inselreich heimgesucht mehr als 3000 sind bis heute verschwunden³¹ “（9.0地震の地震がその島国を襲い、今日まで3000人以上なくなった。）

また、宗教用語„riss “（引きちぎる）と自然現象用語„Tsunami “は以下の文に見られ、„darauf folgende Tsunami riss über 15 800 Menschen in den Tod, im Kernkraftwerk Fukushima Daiichi kam es zum GAU³² “（その上続く津波は約15800人を死へと引きちぎった。福島第一原発はGAUに陥った。）GAUとは原始力発電所での想定可能な最大の規模の事故のことであり、アメリカのスリーマイル島原発事故がGAUの例として挙げられる。

以上より記事Jで使用された宗教用語、„verschwunden “と„riss “によって自然現象への恐れと„GAU “によってスリーマイル事故から連想される原発事故への恐怖を読者は意識したのではないかと考えられる。

³⁰ neues deutschland 2012年3月12日

³¹ 同上

³² 同上

2.4.2 -英語で発信された新聞-

次に英語で発信された新聞、記事K-記事Jのテキスト分析を行った結果を示す。分析した結果、ドイツ語では「自然・エネルギー・政治」にネガティブな宗教用語が使用されていたが、英語の報道においては calm (平穏), hope (希望) などにみられるように、ポジティブな宗教用語が利用されていることがわかった。

また宗教用語の中で、キリスト用語だけでなく仏教用語も合わせて使用されていることがわかった。さらに、仏教徒である日本人が Hero(英雄)として報道された。以下にテキスト分析の詳細を示す。

なお、聖書の英語訳は King James Version of the Holy Bible(1769)を参考とし本文で扱った新聞記事の英語訳は筆者本人が全て行った。

記事Kで使用された用語のカテゴリーの分類を<表13>に示す。

<表13 記事K>

用語	カテゴリー	訳 <宗教用語の場合、聖書内での意味> [出典]
remember	①	思い出す <思い起こす> [Off 3:3]
Loss	①	失う <失った命> [Apg 27:22]
quake	②	地震
tsunami	③	津波
kindness	①	優しさ <親切> [1Mo 21:23]
undertaker	①	葬儀人
calm	①	落ち着き、平穏 <(海が) 穏やかな> [Lu 8:24]
disaster	③	災害

The New York Times(ザ・ニューヨークタイムズ)の記事Kでは宗教用語の“Remember”(思い出す)が記事のタイトル“A Year Later, Japan Remembers Loss and Heroism³³”(一年後日本は失ったものと英雄行為を思い出す)に見られる。この記事はThe New York Timesの2012年3月11日1面に掲載されており、続けて6面の記事Lには、Heroism(英雄的行為)を行った“Hero”(英雄)について詳しく報道されている。“Remember”はドイツ語で„Gedenken”にあたり、ドイツ語では記事Eと記事Fに見られるように、東日本大震災の「犠牲者を思い出す」意味で使用されるが、記事Kのタイトルに見られるような“Heroism”(英雄的な行動)を思い出すという表現はドイツ語の報道では見られなかった。また、記事Kの英雄とは“undertaker”(葬儀人)のことをさすが、The New York Timesによる東日本大震災後の2011年3月31日に報道された記事では“especially the

³³ The New York Times 2012年3月11日

small number charged with approaching damaged reactors and exposing themselves unusually high dose of radiation are viewed a heroes³⁴(特に破損した原発へと向かい異常に高い放射性レベルに身をさらす少数の人々が英雄と見られている)のように福島原発事故後、原発で働く労働者を“Hero”（英雄）と報道しており、“Hero”の対象が「労働者」から「葬儀人」へと変化した様子が見られる。

また、本記事には“undertaker”（葬儀人）の言葉が見られるが、仏教用語である。本記事ではキリスト教用語と仏教用語が混同されて使用されていることがわかる。

〈表14 記事L〉

用語（英語）	カテゴリー	訳 〈宗教用語の場合、聖書内での意味〉 [出典]
Hope	①	希望 〈主（神） [Jer 14:8] 〈魂の鉛〉 [Heb 紙 6:19] 〈至聖所の内側に入っていくもの〉 [Heb 6:19]
Undertaker	①	葬儀人
Calm	①	落ち着き、平穩 〈荒れた海が穏やかな状態〉 [Luk8:24]
disaster	①	災害
beautiful	①	(死体に対して)美しい [Mat23:27]
mourning	①	悲しみ、嘆き〈神から慰められる悲しみ〉[Mat 5:4]
life	①	生命 〈生きている魂〉 [1Mo2:7]
Buddhist	①	仏教徒

記事Lは記事Kの続きとして6面に掲載されている。テキスト分析の結果を〈表14〉に示す、キリスト教用語の“Hope”（希望）、“Calm”（平穩）、仏教用語の“Undertaker”（葬儀人）が以下の記事Lのタイトルで見られ、“Japan Finds Story of Hope in Undertaker Who Offered Calm Amid Disaster³⁵”（日本は災害中に平穩を提供した葬儀人に希望の物語を見つける）“Undertaker”（葬儀人）については次の記事Lの写真キャプションで

“Atsuahi Chiba used Buddhist rituals in caring for nearly 1,000 bodies in Kamaishi³⁶”（アツシチバは釜石市にある1000ほどの遺体を介護するために仏教的儀式を使用した）と、アツシチバが仏教的儀式を使用したことから、仏教徒であると思われる。

一方、“Hope”（希望）とは聖書で「神・魂」を意味するが、記事Lの文では仏教徒である葬儀人の物語の中に見つかるものであることを意味している。また、“Calm”（平穩）についても本来聖書では「海が穏やかな状態」ことを意味するが、本記事では人々の気持

³⁴ The New York Times 2011年3月31日

³⁵ The New York Times 2012年3月11日

³⁶ 同上

ちが穏やかになることを意味している。よってキリスト教用語が本来の意味とは異なる場で使用されているのではないかと考える。また、宗教用語の“mourning”は「人の死を悲しみ、哀悼」を意味するが、聖書では「神から慰められる悲しみ」を意味する。

“mourning”は記事Lの以下の文で、“Mourning starts by taking care of the body³⁷”（悲しみは死体の面倒を見ることから始まる）葬儀人である仏教徒の発言に見られるが、キリスト教徒の読者にとって「神からの慰めは遺体の面倒を見ることから始まる。」と解釈することができる。そこで、仏教徒である葬儀人の発言に用いられた報道のmournとキリスト教の読者が解釈するmournの間には違いがあるのではないかと考える。

〈表15 記事M〉

用語（英語）	カテゴリー	訳 〈宗教用語の場合、聖書内での意味〉 [出典]
Tsunami	②	津波
Flock	①	信者 〈羊・子牛・やぎ〉 [1Mo 30:32]
faithful	①	信頼 〈信仰ある〉 [Ps 31:23]

記事Mで使用されていた用語のカテゴリー分類結果を〈表15〉に示す。記事Mでは福島原発事故によって被災者となった、福島県内にある教会に通う日本人のキリスト教徒について報道された。テキスト分析した結果、記事Mより宗教用語の意味変化が見られた。聖書で「羊・子牛・やぎ」の集団という意味を持つ“Flock”が記事の文では“Uprooted by Tsunami, Church’s Flock Regroups³⁸”（津波から追い立てられて、教会信者たちは再び1つになる。）で見られるように、Flockは「信者」を意味する。

また、人への「信頼」という意味を持つ“faithful”は聖書で「信仰あるもの」を意味し、テキスト内では以下の文のように“chapel’s opening in Japan ends a journey that tested even the most faithful³⁹”（日本での教会開きは最も信じていた者たちを苦しめた旅を終わらせた。）と読むことができ、キリスト教徒を苦しめた避難生活が終わったと、読者が受け取るのではないかと考える。

また、2012年3月の同社の報道記事Lでは釜石市から日本人の仏教徒による被災地での活動について報道したが、2013年3月の記事Mでは福島の教会に通うキリスト教徒の被災者について報道したことから、東日本大震災において宗教と被災者を関連付けさせようとしているアメリカの報道傾向が見られる。

³⁷ The New York Times 2012年3月11日

³⁸ The New York Times 2013年3月12日

³⁹ 同上

2.4.3 -日本語で発信された新聞-

以上より、ドイツ語と英語の報道と比較するために日本語新聞のテキスト分析では、宗教用語に注目した。なお、日本語の新聞は新聞社の思想が表れる社説面を対象としテキスト分析を行った。日本語で発信された新聞、記事N-記事Sで使用された宗教用語a~eを以下<表16>にまとめる

<表16 記事N-記事S>

用語	カテゴリー	意味<キリスト教用語の場合、聖書内での意味> [出典]
a) 希望	①	祈り <神への祈り> [Apg10:4]
b) 復活	①	生き返る <生まれ変わる> [1Pe 1:3]
c) ボランティア	①	支援活動 <兵士になること> [Ri5:2]、 <生贖を捧げること> [4Mo 29:39]
d) 冥福	①	死後の幸福
d) ケア	①	心の問題を予防する支援 <身体の介護、世話> [Lu10:34]
e) 人的パワー	①	力 <権力、支配力> [1Mo 1:28]

a) 希望

テキスト分析を行った結果、宗教用語の「希望」が記事Nに見られた。希望とは2.4.2でも述べたように、聖書で「神・魂」を意味する。記事Nのテキストでは「公共工事は盛んだが、そこに希望を見いだせないのだ。」⁴⁰の文でみられ、「希望を見出せない」ことは聖書より「神・魂を見出せない」という意味では無く「期待できない」ことであると読者は意識するのではないかと考えられる。

b) 復活

宗教用語の「復活」は記事Nに見られた。復活とは聖書で「キリストの復活」を意味するだけでなく「人間が肉体の死後、新たな生命を授かること」⁴¹つまり「生まれ変わる」ことを意味する。記事Nのテキストでは以下の文のように使用されるが、「一時だけの『土建国家』復活は、その反動のほうが心配だ。」⁴²読者は一時的に土建国家が生まれ変わるのではなく、「生き返る」ことと受け取るのではないかと考えられる。

⁴⁰ 朝日新聞朝刊 2013年3月12日 社説

⁴¹ 広辞苑 第六版 岩波書店 (2008,2011)

⁴² 朝日新聞朝刊 2013年3月10日 社説

c) ボランティア

宗教用語の「ボランティア」は記事Pで見られた。ボランティアは聖書で「自ら進んで捧げる」ことを意味し、「生贄」を捧げることや「兵士」になることを意味する。記事Pのテキストでは、「被災地のきめ細かな要望に応えていくには、善意のボランティア活動が必要だ。」⁴³というようにボランティアが使用された。「善意」とは「支援」を意味することから、「善意のボランティア」は「自ら進んで支援する」という意味なるが、聖書本来の意味と異なる。また、毎日新聞の記事Qでは「ボランティア元年と言われた阪神淡路大震災から17年、被災地でがれき処理を手伝ったり、食料や衣料を配るだけでなく、活動範囲の広がりを見張るほどだ。」⁴⁴と報道され、同じく記事Qでも「ボランティア」は被災地の「支援」を意味し、読者はボランティアという言葉から支援活動を連想するようになるのではないかと考える。

また、読者に「ボランティア」すること、つまり被災地を支援することを呼びかけているのではないかと考える。

d) 冥福

仏教用語の「冥福」は記事Pの「午後2時46分、亡くなられた方々のご冥福を祈り、心からの黙とうを捧（ささ）げたい。」⁴⁵、記事Qの『改めて多くの犠牲者の冥福を祈るとともに東北、そして日本の復興を誓う日としたい』⁴⁶という文にみられ、キリスト教用語の「祈る」が合わせて使用されている。冥福は「死者の死後の世界での幸福」を意味し、「祈る」は聖書の中で「神に対する祈り」である。日本語では「冥福への祈り」はクリーシェ⁴⁷として一般的に使用されているが、キリスト教徒から見ると「死後の世界の神へ祈る」意味になり、海外の人々から受け入れ難い表現なのではないかと考えられる。

e) ケア

ケアは宗教用語であり、聖書では身体的な「介護」[Luk 10:34]という意味で使用するが、記事Sでは「心のケアも重要だ。」⁴⁸と、精神的な意味で使用されていることがわかった。「こころのケア」とは「災害・事故・犯罪被害・失踪などに遭遇して起こる心の問題を予防し、あるいは回復をはかるために、心理的・医学的・社会的に行う支援」⁴⁹と既に定義されており、「介護」ではなく「支援」の意味をもつことがわかる。また記事Sより「支援」の重要性を読者に呼びかけているのではないかと考える。

⁴³ 読売新聞朝刊 2012年3月12日 社説

⁴⁴ 毎日新聞朝刊 2012年3月11日 社説

⁴⁵ 読売新聞朝刊 2012年3月12日 社説

⁴⁶ 毎日新聞朝刊 2012年3月11日 社説

⁴⁷ (使い古された) 決まり文句のこと

⁴⁸ 読売新聞朝刊 2013年3月12日 社説

⁴⁹ 広辞苑第六版 岩波書店 (2002, 2011)

f) パワー

宗教用語であるパワー(力)はドイツ語および英語で「支配」[1Mo 1:28]を意味する(支配をドイツ語ではMacht、英語ではPowerと書く)。ドイツ語で精神的な力はKraft[1Mo 31:6]、英語ではStrength[1Mo 4:12]であり、「精神的な力」と「身体的な力」で異なる言葉を持つ。しかし、朝日新聞の記事Rの報道ではパワーを「そんな人的パワーを、暮らしに直結する支援にも使いたい。被災市町村に入って仕事を助けてくれたらどれほど助かるか。」⁵⁰と、文より読者は支配よりも精神的な力として解釈するのではないかと考える。

また、文よりパワーは仕事を助ける「支援」を意味していることがわかる。よって被災地を「支援」することを読者に呼びかけているのではないかと考えられる。

2.5 まとめ

資料調査およびテキスト分析の結果に考察を加える形で本章をまとめる。

ドイツ語で発信された新聞記事の分析を行った結果、調査対象とした新聞記事では東日本大震災で起こった津波と地震、そして福島第一原発事故を振り返るテキストおよび写真、画像が確認できた。つまり、ドイツ語新聞では東日本大震災を振り返る報道を利用し、読者に恐怖を感じさせるような報道を行ったのではないかと考えられる。

ただし、東日本大震災の報道を利用する目的は各新聞社で異なり、記事A～記事Hは読者に自国ドイツのエネギー政策を推進する意識を持たせるためなのではないかと考えられる。

記事Aにみられるように、タイトルをGebete für die Opfer(犠牲者のための祈り、聖書では生贄のため祈り)と書くことで、読者は犠牲者を神の怒りを静めるための生贄と考え、神が引き起こす自然現象の威力に対する恐れを連想するのではないかと考えられる。

また、テキスト分析で見られた宗教用語のFlut(洪水)とvernichtet(破滅した)、Erdbeben(地震)とzerstörten(破壊した)のような自然現象用語と宗教用語の組み合わせによって読者はテキストより東日本大震災の当時の状況と聖書を連想させ、神による「破滅」や「破壊」に対する恐怖を意識するのではないかと考える。

このように、自然現象用語と宗教用語の組み合わせは他にもあることがテキスト分析で明らかになったが、記事Eに見られるErdbeben(地震)とerschüttern(揺らす)は新約聖書ヨハネの黙示録に見られ、さらに記事Hで使用される宗教用語のApokalypse(アポカリプセ)は、新約聖書ヨハネの黙示録を意味し、「この世の終わり」を読者は連想するであろう。

よって読者は東日本大震災の報道を通して「この世の終わり」を連想し、恐怖を抱いたのではないかと考えられる。

また記事Eにみられるように過去に起こった原発事故をschwersten Atomkatastrophe unfall seit Tschernobyl(チェルノブイリ事故以来の深刻な原発災害事故)と記事に書く

⁵⁰ 朝日新聞朝刊 2012年3月10日 社説

ことで1986年に起こったチェルノブイリ原発事故の恐怖を読者は連想するのではないかと考える。

そこで、記事Bにみられるように読者が恐怖を意識するような東日本大震災報道の後に自国のエネルギー政策を掲載し、宗教用語を用いながらエネルギー政策関連用語を神聖化させ、読者がエネルギー政策の重要性を意識するようにドイツ語新聞の紙面全体が構成されているのではないかと考える。

一方で記事I、記事Jにみられるように、自然現象用語と宗教用語を組み合わせることで、自然災害に対する恐怖を意識させ、さらに〈画像2〉に見られるように、造語 Super-GAU in Fukushimaから過去のチェルノブイリ原発事故と福島原発事故を重ねることで読者に原発事故への恐怖を連想させた上で、さらにネガティブな意味を持つ宗教用語を政府や政策に向けることによって読者に反政治体制を意識させようとしたのではないかと考えられる。

このように東日本大震災を利用する報道を行った理由として2011年に福島原発事故の影響を受けてドイツのメルケル首相がドイツの脱原発を宣言し、その後ドイツのエネルギー供給問題、最終貯蔵庫問題、送電問題、そしてエネルギー価格高騰化などエネルギー政策を巡る様々な問題が浮上したことが背景にあると考えられる。

また、英語（アメリカ）で発信された新聞報道においては記事K、記事L、記事Mに見られるように新聞記者独自の視点からhope（希望）、kindness（優しさ）などの宗教用語を利用しながら、東日本大震災後に見られた日本のポジティブな面を報道することで、自国のエネルギー問題と東日本大震災を関連付けない報道を行っていると考えられる。また、Hero（英雄）報道を行うことで読者に安心感を与えるような報道を行っているのではないかと考える。このような報道を行った背景としてアメリカはエネルギー政策において原発推進派であることが考えられる。

一方、日本では「ボランティア」、「ケア」、「パワー」という外来語を利用することで東日本大震災報道を通して「支援」を読者に呼びかけている傾向があるのではないだろうか。

また、これらの言葉は宗教用語の中でキリスト教用語であり、聖書本来の意味とは異なる。ドイツ語と英語のメディア報道においても、報道で使用されている言葉の意味が本来の聖書の意味とは異なる傾向があることが確認できたが、私たちが使用する日本語においても日常的なコミュニケーションを行う際に、その本来の意味を知らずにメディア上で使用されている言葉の意味で言葉を理解し、無意識のうちに使用してしまっている可能性があると考えられる。

そこで、実際に人々は報道内容をどのように受け取りメディアの意識と人々の意識にはどのような差があるのか、インタビュー調査を行った結果を次の章にまとめる。

第3章 インタビュー調査

3.1 調査概要

インタビュー調査では実際の人々の意識を把握することによってメディア報道内容との乖離を明らかにすることを目的とする。テキスト分析では各新聞社の主張に合わせ東日本大震災をある一部の視点のみから報道を行っているように感じられた。そこで、実際の人々の意識とはどのような乖離があるのかを明らかにするために日本とドイツで計2回インタビュー調査を行った。長期休業期間を利用してドイツ州ハレ市に赴き、フィールドワークを行った。

調査では目的を説明し、承諾を得ることができた被験者にドイツ語新聞のテキスト分析より東日本大震災を利用し自国のエネルギー政策に関する記事を発信していたため、インタビューテーマを「自国のエネルギー政策」に設定し、「自国のエネルギー政策についてどう思うか。」対象とした被験者に質問した。

半構造化インタビューの形式を取っており、話の進む項目は自由とした。主な質問項目は以下のとおりである。

〈表 17 主な質問項目〉

主な質問項目
① 「自国のエネルギー政策」についてどう考えているか。
② なぜそのように考えたか。
③ 何が意識に影響したのか。
④ 脱原発に反対か賛成か。

3.2 対象者

インタビュー調査の被験者としてハレ大学 (Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg) で日本学を専攻するドイツ語母語話者の学部・大学院生6名 (女子学生3名、男子学生3名) を対象に2012年度8月、2013年度3月、2013年度8月、計3回に渡ってインタビュー調査を行った。また、帰国後は意識を比較するため慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) でドイツ語を履修する学部・大学院生6名 (女子学生3名、男子学生3名) を対象に同様の調査を行った。2012年度8月はプレ調査として遂行したため、第1回目のインタビュー調査を2013年度3月、第2回目を2013年度8月とする。第2回目の調査では第1回目と同じ被験者12名に加え、三重県へフィールドワークに赴き三重大学に所属する学部・大学院生5名 (女子学生3名、男子学生2名) を対象にインタビュー調査を行った。以下、インタビュー調査における対象者の情報をまとめた。

〈表 18 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) でドイツ語を履修する学部・学院生 6 名
(女子学生 3 名、男子学生 3 名)〉

対象者 (所属)	性別	第 1 回目回答コード	第 2 回目回答コード
S さん (総合政策学部 4 年生)	女性	SFCS1	SFCS2
Y さん (環境情報学部 3 年生)	男性	SFCY1	SFCY2
T さん (環境情報学部 3 年生)	女性	SFCT1	SFCT2
A さん (総合政策学部 3 年生)	女性	SFCA1	SFCA2
H さん (環境情報学部 4 年生)	男性	SFCH1	SFCH2
K さん (総合政策学部 3 年生)	男性	SFCK1	SFCK2

〈表 19 ハレ大学 (Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg) で日本学を専攻する
ドイツ語母語話者の学部・大学院生 6 名 (女子学生 3 名、男子学生 3 名)〉

対象者 (所属)	性別	第 1 回目回答コード	第 2 回目回答コード
A さん (日本学・心理学部 4 年生)	女性	HA1	HA2
B さん (日本学・スポーツ学部 3 年生)	男性	HK1	HK2
T さん (日本学・外国語としてのドイツ語専攻 大学院生)	女性	HT1	HT2
P さん (日本学・政治経済学部 3 年生)	男性	HP1	HP2
K さん (日本学・メディア学専攻 大学院生)	男性	HK1	HK2
N さん (日本学・ユダヤ人学部 3 年生)	女性	HN1	HN2

〈表 20 三重大学に所属する学部・学院生 5 名 (女子学生 3 名、男子学生 2 名)〉

対象者 (所属)	性別	回答コード
N さん (人文学部 3 年生)	男性	MN1
K さん (人文学部 3 年生)	男性	MK1
Y さん (人文学部 2 年生)	女性	MY1
H さん (人文学部 4 年生)	女性	MH1
S さん (人文学部 2 年生)	女性	MS1

3.3 分析方法

インタビューで取れた音源を書き起こし、データの分析方法としてグランデッド・セオリー・アプローチを用いて⁵¹回答にコードを付け、コーディング、カテゴライズを行った。エネルギー政策をめぐってポジティブな意識とネガティブな意識に分類した上で、それが何に対するものなのか、例えば環境問題や経済問題、再生エネルギー問題など対象となるものを分類し、メディア報道と人々の意識の違いを明らかにするために、分析を行った。

3.4 分析結果

第1回目と第2回目のインタビュー調査の結果、ポジティブな意見とネガティブな意見、そして曖昧な意見に分けることができた。以下にその分類分けを示す。

【ポジティブな意見】

〈表 21 第1回目と第2回目インタビュー調査におけるポジティブな意見〉

分類:ポジティブな意見	サブカテゴリー	発言(回答コード)
第1回目インタビュー調査	エネルギー問題	有効な手だてというか 新たなその大規模な発電を変わる方法が出るまではやはり必要な手段ではないのかな(SFCK1) ich finde das ist gut z.b. eine gute Alternative. (HN1) (私は良い代替手段だと思う)
第2回目インタビュー調査	エネルギー問題	反原発、脱原発の方に、まあ、賛成しているという気持ちが強くなってきたって思います(SFCA2) やっぱり原発は、まあ、辞めるべきだっていうのは強くなりましたね(SFCY2) dass ich finde die Energiewende erste mal eine Gute Idee (HT2)(エネルギー政策を良い考えだと思ってる。) ドイツは他の方法があるから原発は必要じゃないと思う。(HK2) Ich denke, dass es dadurch vielleicht endlich in die richtige Bahn gelenkt werden

⁵¹ 萱間真美 『質的研究実践ノート-研究プロセスを進める clue とポイント』(2007年9月1日 第1版第1刷 2010年12月15日 第1版第4刷)

	経済問題	könnte.(HP2)(僕はそれを通してやっと良い方向に進んでいく行けるのかもしれないと思う) Um yeah but I think in the end it's um lower again(HN2)(最後はコストが下がると思う)
--	------	--

分析した結果、大きく二つのサブカテゴリーに分けることができた。まず第1回目の調査よりエネルギー問題に対して日本人学生から、新たな大規模な手段が出るまで原発は必要だと考えている声を得た。一方でハレ大学生からは再生エネルギーを良い代替手段であると考えている回答を得た。

第2回目の調査では日本人学生からエネルギー問題に対して「脱原発」、「反原発」の思いが強くなったという意見を得た。一方でドイツ人学生からは自国の政策を賞賛する声を得た。また、経済問題において現在ドイツで高騰化している電気料金⁵²も「いつかは安くなる」と考えていることがわかった。

ハレ大学で日本のエネルギー政策について講義を履修した K くんからは「エネルギー問題」に関して「日本には資源が無いから脱原発は難しい。」という意見を得た。

【ネガティブな意見】

〈表 22 第1回目インタビュー調査におけるネガティブな意見〉

分類：ネガティブな意見	サブカテゴリー	発言(回答コード)
第1回目インタビュー調査	関心の低さ	あまりみんなが真剣に考てこなかったのかなと思う。(SFCS1) 正直エネルギー問題とか考えたことないんですけど(SFCA1) 思い浮かばないっていうか正直なところ(SFCT1)

⁵² Frankfurter Allgemeine Zeitung 2013年2月9日

	<p>原発問題</p>	<p>es ist unglaublich gefährlich (HN1) (ありえないくらい危険)</p> <p>自国の原発をそのやっぱり事故起こしちゃって安全性が保障されていない (SFCY1)</p> <p>Japan gibt es zu viel Atomkraftwerke auf in dem Raum ist unverantwortlich für die Gesellschaft (HK1)</p> <p>(日本には社会で対応できないほどの原発がある)</p>
	<p>最終貯蔵庫問題</p>	<p>außerdem in Deutschland gibt es kein gut Endlager also (HA1) (特にドイツでは良い最終貯蔵庫が無い)</p>
	<p>エネルギー問題</p>	<p>なんかクリーンエネルギーっていう可能性が私まだ見えてなくて (SFCA1)</p>
	<p>核廃棄物問題</p>	<p>核の廃棄、ってところが一番不透明なのかな (SFCA1)</p> <p>核燃料の、をどういふふう処理して行くのか (SFCA1)</p> <p>die Atomkraftwerk den Atomkraftmüll ablösen lassen. (HA1) (核廃棄物を解決しなければならない)</p> <p>Brennstäbe muss doch abgetanzten das ist in Deutschland schon sehr schwierig (HK1) (使用された核燃料棒はドイツで既にとても困難な問題)</p>
	<p>送電問題</p>	<p>es gibt auch erste mal Probleme das einfach nicht weit genug die Storm wie man Energie speichern kann weiterleitet kann (HP1) (簡単じゃない問題がある、どのようにエネルギーを蓄えるか送電できるか十分なエネルギーが問題)</p>

	政治問題	in Deutschland sehr andere Dinge gesprochen werden über in der Politik welche Skandals welche hast mitbekommen(HT1) (ドイツでは政治でどのスキャンダルが誰に起こったのあ他のことが議論される)
--	------	--

第一回目のインタビュー調査の結果で得たネガティブな意見の原因となる理由は様々であり、大きく[関心の低さ]、[原発問題]、[再生エネルギー問題]、[最終貯蔵庫問題]、[送電問題]、[核廃棄物問題]、[政治問題]というサブカテゴリーに分けることができた。

また、日本に長期間留学経験があるハレ大の大学院生 KN さんからはドイツ人の視点から見た日本の「原発問題」について日本には「核燃料棒」を廃除しなければならない問題と、核燃料廃棄物をおさめる「貯蔵庫」の問題がドイツも日本でも深刻な問題であるという意見を得た。また、「富士山がある日本の伝統的な景観に最終貯蔵庫が建つことを想像すると、とても悲しく、もどかしい気持ちになる。」と話してくれた。

【ネガティブな意見】

〈表 23 第 2 回目インタビュー調査におけるネガティブな意見〉

分類：ネガティブな意見	サブカテゴリー	発言(回答コード)
第 2 回目	関心問題	正直なところですね、自分の中だと若干風化している(SFCY2)
	メディア問題	報道とかで原発の話題っていうのがだんだん少なくなってきて(SFCY2)
	原発問題	感覚的に海に汚染水が流れるっていうのは、かなりまずいっていうのがすごい感じられた(SFCK2)
	最終貯蔵庫問題	um ich habe mitbekommen dass es immer noch es gibt einen großen Streit für Endlager den Atommüll(HA2) (核廃棄物の貯蔵庫についてまだ大きな議論がある)

	政治問題	ich denke man sollte diese Energiepolitik sollte transparenter sein. Erste die Menschen sollten besser informiert werden (HT2) (エネルギー政治はもっと明確になるべきだと思う。人々にもっと良く知らせなければ。)
	経済問題	Um ...I think it' s dirty (business) (HN2)(私は汚いビジネスだと思っている)

第2回目のインタビュー調査におけるネガティブな意見として[関心問題]、[原発問題]、[メディア報道問題]、[最終貯蔵庫問題]、[政治問題]、[経済問題]の6つのカテゴリーに分けることができた。また、ここではSFC学生のYさんとSFC学生のKさんに意識変化が見られ、原因としてメディア報道がSFC学生に影響を与えていることがわかった。

第1回目の調査では原発はまだ必要と考えていたSFC学生のKさんの意見より意識変化が見られた。また、その理由としてフクシマ原発をめぐる汚水問題の新聞報道が意識に影響していることがわかった。一方でSFC学生のYさんの回答より報道が減少しているから自身のエネルギー対策への関心が低くなったと回答し、両者よりメディアが意識に与える影響があることがわかる。一方で今回ネガティブな意識を回答したハレ学生のAさん、ハレ学生のTさんは、ハレ学生のHNさんは3人とも近頃ニュース報道を見ていないことがわかった。ハレ大学生のAさんからは「残念ながら近頃新聞をあんまり読んでない」という声や、Tさんからは「最近情報を得ていない」という回答を得た。ドイツ人学生と日本人学生の間には日常のメディア報道に対する姿勢の違いがあるのではないかと考えられる。

【曖昧な意見】

〈表 24 第1回目インタビュー調査における曖昧な意見〉

分類：曖昧な意見	サブカテゴリー	詳細カテゴリー	発言(回答コード)
	①原発は亡くすべき	a. 環境問題	汚染水とか問題を見てて、思うには思うんだけど (SFCS1)
		b. 周囲からの影響	原発再稼働禁止とかそういう声が周りからあったから (SFCT1)

		c. 再生エネルギーを増やす.	段階的には無くして、可能であれば再生可能エネルギーすべき(SFCH1)
②完全廃止は困難	a. 自国の安全保障		安全面を考えると全くなくして北朝鮮がすごく脅威に来た時に日本が何もできない状態っていうのはそれはそれで怖いな(SFCS1)
	b. 雇用問題		給料もらって雇用してもらっている人がいるという点で無くなるのは厳しいんじゃないかなっ(SFCT1)
③脱原発可能	a. 再生エネルギーの開発		ich denke in Deutschland für einen Solarenergie Solar und Windenergie bei uns gut war(HA1)bei (私はドイツでソーラーエネルギーと風力が有効だと思ってる)
④困難	a. 他国の原発利用		wir betreiben Frankreich z. b. wir können aber aber importieren dann für die Atomanergie ins Ausland (私たちはフランスを雇っていて例えば他国から原子力を輸入できる)

		b. エネルギー不足	ich denke ganz aussteigen ist schwierig weil sehr viele Energie gewindet durch Atomenergie(HK1) (私は完全に脱原発するの は難しいと思う原子力お 通して多くが動いている)
--	--	------------	--

インタビュー調査で得た曖昧な意見として日本人学生からは①原発を完全に廃止するべきである、②原発は現状必要である、という2つの問題点で意識が揺れ動いていることがわかった。ハレ学生は③脱原発可能だと考えているが、④困難と考えている面があることもわかった。①～④と考える理由を詳細カテゴリーに分け、そこからさらにサブカテゴリーのポイントとなる回答を<表 15>にまとめた。SFC 学生とハレ学生の間では「困難」という言葉が共通し、SFC の学生もハレ学生も脱原発することに対して「困難」と共通した意識を持っていることがわかった。

<表 25 第2回目インタビュー調査における曖昧な意識>

分類：曖昧な意見	サブカテゴリー	詳細カテゴリー	発言コード
	①原発反対	a. 汚水問題	廃止した方が、原発とか 良いんだろうな、その汚 染水とか問題を見てて、 思うには 思うんだけど(SFCS2)
	②今は原発必要	a. 経済問題	きっと5年間で今ほど きっと日本が既に経済 とか衰退しているのに もっと衰退しちゃうの かなって思うと今の日 本にはとりあえず必要 (SFCS2)

		b. エネルギー問題	廃止したところで日本がその代替エネルギーとかを、まあ上手く他国からもらって来れるのかっていうところは、やっぱり疑問に感じる(SFCS2)
	③やむおえない	a 政治問題 b. エネルギー問題	もちろん僕も原発反対ですけど、現実的に考えた時に再生可能エネルギーの法制をしっかりとっていきつつ原発を止める方向に行った方が良くかな(SFCH2)

【三重大学生へのインタビュー調査】

日本とドイツにおいて地震が発生する可能性及び原発の有無における意識の比較調査を行うためにハレ市と同じく大都市郊外地区にあり、人口規模・密度が等しく浜岡原発付近にある三重県三重大学の学部・院生にインタビューを行った。以下<表 26>にポジティブな意見、ネガティブな意見、曖昧な意見として分類分けした結果を示す。

<表 26 三重大大学の学部・大学院生調査結果>

分類：ポジティブな意見	サブカテゴリ	テキスト
	将来の地元の被災	震災ボランティアに行っ、現状をすごい見えてきて自分の地元もこうなっちゃうんじゃないかなっていう、不安とかもすごいありましたけど、宮城県の復興の様子とかも見てると人もすごい優しくて一致団結して全国からもすごい集まって、僕の地元もそうならいいな(M1)

	原発の不安を感じない	あんまり意識したことないっていったらなんか、 原発の人に対して失礼ですけど 生活している以上はそんなに 危険だなと感じて ることはあんまりなくて(M3)
分類:ネガティブな意見	原発事故への不安	もし事故が起こったら相当な範囲に被害が出ると 思うので不安ちゃ、不安ですね(M2)
	津波への不安	実際怖いね大学とかだとさ、、海の裏にあるんだよ ね大学だからもう、そう、地震が来たらもうどうす るっていうくらいの所にあるんだ(M4)
分類：曖昧な意識	エネルギー政策への立場 を決めることができない	原発反対っていう動きはすごく今あるけど、 だからといって今原発を停止したら、その、日本で いる電力っていうのは全て賄えるかっていうの は、そうでもないし むしろ足りないくらいの量(M4)
	原発は不安だが反対でき ない	結構原発できてから町も潤ったので、 お金とかもあってあんまり一概に不安で、あ、い、 断固反対っていうのは言いづらいな(M1)

インタビュー調査を行った結果、ネガティブな意見として原発問題に対する不安や、津波災害に対する不安の声を聞くことができた。また父親が浜岡原子力発電所で働く N さんからは、原発に反対できないという意見を得た。N さんのように原発によって生計が立てられている人々は原発に反対できない考えを持っているのが現状であろう。一方でポジティブな意見として震災ボランティアを行った三重大生の N さんから自身の地元が震災の被害にあった際は支援する人々が集まる場所になって欲しいという回答を得た。

第四章 総括・展望

4.1 文献調査とインタビュー調査を通じた考察

文献調査とインタビュー調査より人々の意識と報道内容を比較した結果、両者の間には乖離があると考えられる。ドイツ語新聞のテキスト分析の結果から、記事A、記事D、記事Eでは東日本大震災について報道されており、記事Bではその報道を利用して自国のエネルギー政策について批判していることが明らかになった。しかし、インタビュー調査により、ハレ大学のTさんは「ドイツのエネルギー政策は良い」と感じており、また同大学の学生Hさんは「ドイツのエネルギー政策はやっと良い方向に進んでいく」と考えていることが分かった。このことから、実際にドイツの学生が持っている、エネルギー政策に対するポジティブな意見は、ドイツ語メディアの報道内容には反映されていないと言える。

また、第1回目のインタビュー調査よりドイツ人学生の意識とドイツ語の新聞報道を比較するとインタビューでハレ大学の学生Aさんが「最終貯蔵庫問題を解決しなければならぬ」と述べている。また記事Eに見られるように、東日本大震災の報道を利用してドイツの最終貯蔵庫問題について報道していたことから、人々の最終貯蔵庫問題に対するネガティブな意識と報道は一致していると言える。ただし、2.5のまとめで述べたように自国のメディアが東日本大震災を振り返る内容であるという意識や、津波や地震に対する恐怖が助長されたという回答は得られなかった。つまり、報道内容と人々の意識には乖離があるが、その報道の意図と人々の意識は同じであると考えられる。

インタビュー調査によりドイツ人学生は新聞を読む機会が少なくインターネットを通して新聞社のウェブサイトから情報を得たり、テレビニュースからニュース情報を得ていることから、新聞媒体から直接的な影響は無くともエネルギー政策に関して、メディア媒体による人々への意識に向けた意図的な操作があるのではないかと考えられる。またその背景には、2022年までに全ての原発を廃止するという政策の実現があると考えられ、政治によるメディア操作があると考えられる。

日本人の学生の意識とメディアとの乖離については、日本のメディアでは、記事P、記事Q、記事Sのようにニュース報道では読者に向けて「震災ボランティア」、「被災者の心のケア」、「人的パワーによる被災地支援」に見られるように、報道を通して人々に被災地を「支援」することを呼びかけていることが明らかになった。インタビュー調査を行った結果、日本人学生Nさんは実際に「震災ボランティア」を行ったことが明らかになった。

一方で、エネルギー政策面に関しては報道されているものの、国策への提言に留まっていることが多いと感じられた。日本人学生のYさんは、「自身の中でエネルギー政策に関する

関心が低くなっている」と回答している。このことから、メディアは被災地支援についての報道に焦点を当て、それによってエネルギー政策に対する人々の関心を薄くさせようとしているのではないかと考えられる。

一方で、ドイツ人学生の意識と日本人学生の意識を比較すると第一回目のインタビュー調査結果の【曖昧な意見】より日本人学生は「原発問題」に対して「原発を無くすべき」だと考える一方で「必要である」と考える曖昧な意見を6人中4人から得られた。また、第1回目と第2回目のインタビュー調査を比較すると、SFC学生Kさんの回答より第1回目は「原発は必要である」という考えから第2回目は「原発に対する不安が大きくなった」と意識が変化したことやSFC学生AさんとSFC学生Yさんからは第二回目のインタビュー調査で「第一回目のインタビュー時よりも脱原発に賛成する意識が強くなった」という回答から人々のエネルギー政策に対する意識は複雑であり、思いが揺らいでいる様子が観察された。

以上のことから、人々の意識とメディア報道には乖離があることが明らかになったが、日本人学生の意識がメディア報道に大きく影響されている部分も見られた。このことから、日本人学生は情報に対して受身の姿勢であり、ドイツ人学生のように自ら情報を得る姿勢が欠けているのではないかと考える。

4.2 本調査の限界・反省

本研究における限界としてまずは調査対象テキスト内容を統一するために東日本大震災を振り返るテキストしか調査できなかったことである。過去の地震やその他の事件で今回確認できた宗教用語がどのような意味や表現で使用されていたのか、確認できなかった。本調査を継続する上での課題としたい。また、反省は記事内で使用されている宗教用語は全て追いきれていないことである。今後も調査を継続していくことで宗教用語の知識を増やしていきたい。また、インタビュー調査においては被験者が少なかったことも今後の課題である。アンケート調査も行う予定であったが、今回は実行できなかったことが大きな反省点である。本研究は継続を予定しており、アンケート調査を行うことによって実際の人々の意識傾向を明らかにしたいと思う。

4.3 今後の展望

本研究を終えて、今後の展望として2つ挙げられる。

私たちが日常的に使用している言語は、意味が変化している。ドイツ語報道における宗教用語の使用にみられるように、1522年にルターが聖書を訳した意味とは少し変化したものだけでなく、大きく変容されている用語もある。またそれは、現在私たちが普段使用している日本語の中では異なる意味で使用されている場合もある。この点において今後私たちが普段使用する言葉を振り返る必要がある。それは異文化理解においても重要であるが、私たちが普段日本語を使用する日常的なコミュニケーションによる価値観や意識の理解のためにも重要である。

また、メディア上で発信されている情報はある事故・事件において一つの見方でしかない。私たちはそのことを認識した上で、今後自ら情報を得ていく主体的な姿勢が必要であり、またその情報が発信されている言語によってどのような意味を持つのか理解し、自分自身と世界との関わりを見ていくことも必要である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、温かく熱心にご指導して下さった藁谷先生に心より感謝致します。思うように進まない中、ずっと見守ってく下さり、ありがとうございました。また、お忙しい中常に私の身体を気遣って下さり、藁谷先生の優しさに改めて感謝致します。

また、本研究を進めるためにインタビュー調査に協力してくれたハレ大学生のみなさん、SFC 学生のみなさん、三重大生のみなさん、あらゆる手段で資料収集に協力してくれたハレの友人、研究を進めるにあたって多くのアドバイスやフィードバックを下さったハレと SFC の先輩方、いつも私を励まし、慰めてくれた家族、先生方、そして多くの仲間に深く感謝します。

そもそも、私が研究のツールとして使えるドイツ語を得ることができたのは SFC のドイツ語学習のおかげです。いまでもドイツ語研究室のスタッフとして毎日ドイツ語学習を継続できていること、嬉しく思います。また、毎日見守り、常に支えてくださるドイツ語研究室のスタッフのみなさまに改めて感謝します。

非常に恵まれた環境で学べたこと、そして興味深い研究テーマに出会えたこと、大変幸運であると思っております。今後もめげずに本研究を粘り強く継続し、調査に励んでいきたいと思っております。

支えて下さったみなさま、本当にありがとうございました。

引用文献・参考文献

- Peter (2010) : Die Bibel - Einheitsübersetzung der Heiligen Schrift
Gesamtausgabe, Verlag Clvocoressi
- Christoph Wetzels (2008) : Das Grosse Lexikon der Symbole , Primus Verlag
Gosse Konkordanz zur Lutheribel, Calwer Verlag Stuttgart, (2001)
- Walter Gerlach (1998) : Das neue Lexikon des Aber- Glaubens, Eichborn, Verlag
- Willi Hoffsummer (1999) Lexikon alter und neuer Symbole für die Praxis
christlich gedeutet , Grünewald Verlag
- 秋山隆平『情報大爆発コミュニケーションデザインはどう変わるか』 (2007)
- 朝日新聞社『原発とメディア』 (2012)
- 朝日新聞社『報道写真全記録 2011. 3. 11-4. 11 東日本大震災』 (2011)
- 上杉隆『原発とメディア不都合な真実』 (2012)
- 上丸洋一『原発とメディア 新聞ジャーナリズム 2 度目の敗北』 (2012)
- 河北新報社『再び立ち上がる 一河北新報社、東日本大震災の記録』 (2012)
- ガイ ドイツチャー (著), 椋田 直子 (翻訳)『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』
(2012)
- 河北新報社『東日本大震災全記録 被災地からの報告』 (2011)
- 萱間真美 『質的研究実践ノート-研究プロセスを進める clue とポイント』 (2007 年 9 月
1 日 第 1 版第 1 刷 2010 年 12 月 15 日 第 1 版第 4 刷)
- 共同通信社『いま原発で何が起きているのか-原発震災の 100 日』 (2011)
- 共同通信社『東日本大震災 : 特別報道写真集 : 2011. 3. 11 : 1 カ月の全記録 : M9.0 日
本は決して屈しない : 地震・津波・放射能
汚染』 (2011)
- 共同通信社『東日本大震災-地震・津波・原発被災の記録-特別報道写真集』 (2011)
- 産経新聞社『日本人のそこ力-東日本大震災一年の全記録』 (2012)
- 産経新聞社『東日本大震災 1 カ月の記録 -闘う日本』 (2012)
- 武田徹『原発報道とメディア』 (2011)
- 豊田直巳『TSUNAMI3. 11-東日本大震災記録写真集』 (2011)
- 中谷彰・松川弘・嶋田洋一郎・西田知子・岩本忠夫・山本洋一・山口泰代 『ドイツ 言
語文化と社会-作家・思想化たち軌跡-』 (1994)
- 文化通信社『その時メディア産業は-東日本大震災 2011 年 3 月 2 1 日付~6 月 6 日付紙
面でみるメディア産業の動向』 (2011)
- 横山裕道 『3. 11 学地震と原発そして温暖化』 (2012)
- 読売新聞社『記者は何を見たのか 3. 11 東日本大震災』 (2011)
- 読売新聞社『読売新聞報道写真集 東日本大震災読売』 (2011)

『報道写真全記録 2011. 3. 11-4. 11 東日本大震災』朝日新聞社・朝日新聞出版(2011)
宮田光雄 『ナチ・ドイツ語と言語-ヒトラー演説から民衆の悪夢まで-』(2002)

<参考雑誌>

Der Spiegel (デア・シュピーゲル) (16/2013 Atommuell Wo ist der Feind? S. 30-31, 26/2013 Politische Entsorgung S. 38-39)

Die Zeit (ディ・ツァイト) (14. FEBRUAR, 2013 POLITIK S. 11)

月刊誌『COURRIER Japon』(クーレ ジャポン) (2011年5月号, 2011年6月号, 2011年7月号, 2012年5月号, 2012年9月号)

Eric Johnston 『The Japan Times NEWS DIGEST 臨時増刊号 3.11 大震災・福島原発を海外メディアはどう報じたか』(2011)

【付属資料① 研究対象記事】

対象新聞記事	コード定義			
	コード	発信言語	新聞社	発行日 (年.月.日) 記事掲載順
2012年				
D(F)20120309A	D(ドイツ語)	(F)(Frankfurter Allgemeine Zeitung <フランクフルター・アルゲマイネ新聞>)	20120309 2012.03.09	A (第一記事)
D(F)20120309B	D(ドイツ語)	(F)(Frankfurter Allgemeine Zeitung <フランクフルター・アルゲマイネ新聞>)	20120309 2012.03.09	B (第二記事)
D(F)20120309C	D(ドイツ語)	(F)(Frankfurter Allgemeine Zeitung <フランクフルター・アルゲマイネ新聞>)	20120309 2012.03.09	C (第三記事)
D(F)20120301011A	D(ドイツ語)	(F)(Frankfurter Allgemeine Zeitung <フランクフルター・アルゲマイネ新聞>)	20120301011 2012.03.10/1 1	A (第一記事)
D(F)20120312A	D(ドイツ語)	(F)(Frankfurter Allgemeine Zeitung <フランクフルター・アルゲマイネ新聞>)	20120312 2012.03.12	A (第一記事)
D(M)20120312A	D(ドイツ語)	(N)(Mitteldeutsche Zeitung <ミッテル・ドイチュェ新聞>)	20120312 2012.03.12	A (第一記事)
D(N)20120307A	D(ドイツ語)	(N)(neues deutschland <ノイエス・ドイチュラント>)	20120307 2012.03.07	A (第一記事)
D(N)20120308A	D(ドイツ語)	(N)(neues deutschland <ノイエス・ドイチュラント>)	20120308 2012.03.08	A (第一記事)
D(N)20120309A	D(ドイツ語)	(N)(neues deutschland <ノイエス・ドイチュラント>)	20120309 2012.03.09	A (第一記事)
D(N)2012031011A	D(ドイツ語)	(N)(neues deutschland <ノイエス・ドイチュラント>)	2012031011 2012.03.10/1 1	A (第一記事)
D(N)2012031011B	D(ドイツ語)	(N)(neues deutschland <ノイエス・ドイチュラント>)	2012031011 2012.03.10/1 1	B (第二記事)
D(N)20120312A	D(ドイツ語)	(N)(neues deutschland <ノイエス・ドイチュラント>)	20120312 2012.03.12	A (第一記事)
D(N)20120312B	D(ドイツ語)	(N)(neues deutschland	20120312	B (第二記事)

		<ノイエス・ドイチュラント>	2012.03.12	
A(N)20120311A	A(英語 <アメリカ>	(N)(The New York Times <ザ・ニューヨークタイムズ>	20120311 2012.03.11	A (第一記事)
A(N)20120311B	A(英語 <アメリカ>	(N)(The New York Times <ザ・ニューヨークタイムズ>	20120311 2012.03.11	B (第二記事)
A(N)20120313A	A(英語 <アメリカ>	(N)(The New York Times <ザ・ニューヨークタイムズ>	20120311 2012.03.12	A (第一記事)
J(A)201203010A	J(日本語)	(A)朝日新聞	20120309 2012.03.09	A (第一記事)
J(A)201203010A	J(日本語)	(A)朝日新聞	201203010 2012.03.10	A (第一記事)
J(A)201203011A	J(日本語)	(A)朝日新聞	201203011 2012.03.11	A (第一記事)
J(A)201203012A	J(日本語)	(A)朝日新聞	201203012 2012.03.12	A (第一記事)
J(AM)20120312A	J(日本語)	(AM)朝日新聞三重県版	201203012 2012.03.12	A (第一記事)
J(Y)20120309A	J(日本語)	(Y)読売新聞	201203009 2012.03.09	A (第一記事)
J(Y)2012310A	J(日本語)	(Y)読売新聞	201203010 2012.03.10	A (第一記事)
J(Y)20120311A	J(日本語)	(Y)読売新聞	201203011 2012.03.11	A (第一記事)
J(M)20120307A	J(日本語)	(M)毎日新聞	201203007 2012.03.07	A (第一記事)
J(M)20120309A	J(日本語)	(M)毎日新聞	201203009 2012.03.09	A (第一記事)
J(M)201203010A	J(日本語)	(M)毎日新聞	201203010 2012.03.10	A (第一記事)
2013 年				
D(F) 20130309A	D(ドイツ語)	(F) (Frankfurter Allgemeine Zeitung <フランクフルター・アルゲマイネ新聞>	20130309 2013.03.09	A (第一記事)
D(F) 20130311A	D(ドイツ語)	(F) (Frankfurter Allgemeine Zeitung <フランクフルター・アルゲマイネ新聞>	201303011 2013.03.11	A (第一記事)
D(F) 20130312A	D(ドイツ語)	(F) (Frankfurter Allgemeine Zeitung	201303012	A (第一記事)

		<フランクフルター・アルゲマイネ新聞>	2013.03.12	
D(M) 20130311A	D(ドイツ語)	(M) (Mittel Deutschland <ミッテル・ドイチュラント>)	201303011 2013.03.11	A (第一記事)
D(N) 20130312A	D(ドイツ語)	(N) (neues Deutschland <ノイエス・ドイチュラント>)	201303012 2013.03.12	A (第一記事)
D(N) 20130312B	D(ドイツ語)	(N) (neues Deutschland <ノイエス・ドイチュラント>)	201303012 2013.03.12	B (第二記事)
A(N) 20130311A	A(英語 <アメリカ>)	(N) (The New Yor Times <ザ・ニューヨークタイムズ>)	201303011 2013.03.11	A (第一記事)
J(A) 20130309A	J(日本語)	(A) 朝日新聞	20130309 2013.03.09	A (第一記事)
J(A) 20130311A	J(日本語)	(A) 朝日新聞	20130311 2013.03.11	A (第一記事)
J(A) 20130312A	J(日本語)	(A) 朝日新聞	20130312 2013.03.12	A (第一記事)
J(AM) 20120312A	J(日本語)	(AM) 朝日新聞三重県版	20120312 2012.03.12	A (第一記事)
J(Y) 20130309A	J(日本語)	(Y) 読売新聞	20130309 2013.03.09	A (第一記事)
J(Y) 20130310A	J(日本語)	(Y) 読売新聞	20130310 2013.03.10	A (第一記事)
J(Y) 20130312A	J(日本語)	(Y) 読売新聞	20130312 2013.03.12	A (第一記事)
J(M) 20130310A	J(日本語)	(M) 毎日新聞	20130310 2013.03.10	A (第一記事)
J(M) 20130311A	J(日本語)	(M) 毎日新聞	20130311 2013.03.11	A (第一記事)
J(M) 20130312A	J(日本語)	(M) 毎日新聞	20130312 2013.03.12	A (第一記事)